

Title	第二言語教育におけるバフチンの視点 : 第二言語教育学の基盤として
Author(s)	西口, 光一
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/50579">https://hdl.handle.net/11094/50579</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 西 口 光 一 )

論文題名

第二言語教育におけるバフチンの視点 — 第二言語教育学の基盤として

## 論文内容の要旨

ヨーロッパ系のダイレクト・メソッドとアメリカ系のオーディオリンガル・メソッドが衰退し、コミュニカティブ・アプローチの言語教育革新運動を経て、第二言語教育の方法はリベラルになった一方で、理論も原理もない教師任せの状況になっていると言わなければならない。そのような現在の状況において、バフチンの言語哲学が第二言語教育と第二言語教育学に大きな貢献をするであろうとの認識は広く共有されているところとなっている (Hall, 1993; 1995, Johnson, 2004, など)。しなしながら、バフチンの思想が多岐にわたり、そのテキストが晦渋であることもあり、これまでのところ、第二言語教育の関心からバフチンの言語哲学を包括的に解明するという作業は行われていない。そのような認識の下に、本研究では、バフチンの思想の中で言語論の部分に焦点を当てて、第二言語教育の関心に引きつけてバフチンの言語観の全体像を描き出すことを企図した。それを実行するにあたり、本研究では、バフチンのテキストに準拠しつつも、バフチンの言語哲学を分かりやすく呈示するためにそれを独自のルートで再構成する形で議論を進めた。

まず始めに、バフチン言語論の基本的視座を知るために、バフチンの言語への基本的視点を解明した。バフチンによると、人と人の中で交わされる記号の客観的現実、社会的交通 (sotsialnoe obschenie) に埋め込まれており、社会的交通はさらに社会の経済的組織の上に構築されている。われわれは、社会の経済的組織の上で記号あるいは言語を随伴させながら社会的交通を営んでいる。そして、そこにイデオロギー的現実すなわちわれわれの社会文化的な現実を(再)生産している。言語や記号は、この交通が物象化された結果であり、そのようなイデオロギー的交通の脈絡にある発話こそが言語の真の姿である、となる。言語に対してこのような基本的視線を持つバフチンはソシュールを代表とする抽象的客観主義の言語観を、かれらが言語とするのはラングつまり規範的に自己同一的な言語形態の体系 (system of normatively identical forms) であり、それは反省の所産であって、言語活動に従事する主体の言語意識に関わるものではない、と批判する。そして、本研究では、そのようなラング的な言語観が第二言語教育における基本的な言語観となり、それが過去及び現在の第二言語教育のパラダイムの基盤となっていることを論証した。以上が、第1章と第2章の概略である。

第3章と第4章では、バフチン言語論における主観的心理についての見解を明らかにし、バフチンの思想との親近性が指摘されるヴィゴツキーの発達論を概観した上で、両者の重なる中心点を指摘した。バフチンにおいては、人間の主観的心理はその存在の場を生体と外部世界の間領域に持っており、それは生体と外部世界との記号を介した出会いであり、それは具体的には内的言語つまり内言となる。この点すなわち記号による媒介性において、バフチンの言語観とヴィゴツキーの思考とことばの発達の見解は重なる。そして、バフチンの主観的心理の議論は、表現こそが体験を組織するという見解においてヴィゴツキーの文化的発達の一般的発生法則と重なり、ことばを媒介とした人間のイデオロギー的形成という見解へと至る。

こうした議論を経た上で、第5章と第6章では、言語活動従事に関与している知識は何かという質問を立て、その質問に対してバフチンのことばのジャンルの概念を軸として回答を導き出すことを試みた。言語行使のどの領域もことばのジャンルと呼ぶところの発話の相対的に安定した諸タイプを作り上げているという議論から始まるバフチンのジャンル論は、われわれは一定のことばのジャンルでもって話しており、発話はラングの諸形式の完全に自由なコンビネーションと見なすことはできないという指摘を経て、われわれが言語を習得するのは周囲の人たちとの生きた言語コミュニケーションの中でわれわれが耳にしました自らも再現する生きた具体的な発話によってであり、そのような中でラングの諸形式もことばのジャンルと緊密に結びついた形で習得されるとの議論へと発展する。そして、結論として、バフチン言語論においては、言語活動従事に関与している知識はことばのジャンルである、となる。本研究では、このような働きをすることばのジャンルの特性について、ホール (Hall, 1993; 1995) の議論を援用してさらに考察した。その結果、(1)ことばのジャンルとは歴史的な意識を染み込ませたプロトタイプの言語行使の集合であること、

(2)ことばのジャンルはしばしば実体のあるもののように論じられるが当事者の視点ではジャンルの存在は気づかれないこと、(3)そのような意味で言うことばのジャンルとは言語活動従事の契機において言語活動従事者が過去の経験に基づいて援用するホログラム的な社会歴史的なリソースの集合であること、が明らかになった。そして、そのように見るならば、ことばのジャンルとその働きは言語活動従事者において働くヒューリスティックな社会歴史的諸力(Hall, 1995)と見ることができた。

ことばのジャンルの議論から導き出されたヒューリスティックな社会歴史的諸力という概念は、バフチンの言語哲学の核心である対話や対話原理を読み解くためのキー概念となる。一方で、バフチンは、言語論を主題とする『マルクス主義と言語哲学』(バフチン, 1929/1980)と「ことばのジャンル」(バフチン, 1952-53/1988)では、対話原理については必ずしも明快に議論していない。対話と対話原理を捉えるためには、われわれは『ドストエフスキーの詩学』(バフチン, 1963/1995)や「ドストエフスキー論の改稿によせて」(バフチン, 1961/1995)に分け入らなければならない。本研究では、第7章の前半で、第4章を除く第1章から第6章までの議論を要約した上で、第8章で、社会歴史的諸力をキー概念として、上に挙げたバフチンのテキストを綿密にたどることで、バフチンにおける対話と対話原理について以下のような結論を得ることができた。

- (1) 言語活動の現場にある言語活動従事者においては、社会歴史的諸力に駆動されて、他者の声に対するわたしの声とわたしの声に対する他者の声からなるポリフォニックな対話的空間が現出する。
- (2) 対話あるいは対話的交流とは、表面的には外言のやり取りとなるが、その内実としては、変化し続ける一つのポリフォニックな対話的空間ともう一つの同じく変化し続ける対話的空間との間で行われる相互作用である。
- (3) 対話原理とは、何らかの特定の原理群のことでなく、ことばのやり取りを伴う人と人の接触・交流を、そして人間の意識や心理のあり様を、そのように対話的に見るという主義あるいは流儀である。

一方、第7章の後半では、バフチン言語論をより包括的な視野として再構成してその意義を改めて確認するために、文化人類学者ホランド(Holland et al., 1988)の自己とアイデンティティについての実践理論(a practice theory of self and identity)を紹介し、検討した。バフチンの思想を応用したホランドの理論によると、われわれは物理的な世界に生の基盤を置きながらも形象世界(figured world)に生きている。われわれは自身の記号的実践を通して自己と自己を取り巻く世界を創作している。生においてわれわれは常に自己創作(self-authoring)しているのであり、それには記号(ホランドにおいてはcultural forms)が直接に関与している。そして、こうしたホランドの見解は、第9章での基礎日本語教育への応用の議論へとつながる。

第9章と第10章は、バフチン言語観の応用例の議論となる。第9章は教育実践への応用で、具体的には自己表現活動中心の基礎日本語教育のカリキュラムと教材の開発について議論する。バフチンの言語観は、(1)第二言語習得の経路は第二言語によって段階的に自己創作できるようになる経路としてデザインすることができ、(2)ローカルな言語習得は言葉遣いの流用(appropriation)の心理過程としてデザインすることができるという形で、第二言語のカリキュラムと教材の開発に応用することができる。同章では、CEFRの記述をも挙げながら自己表現活動を第二言語教育において見過ごされてきたが重要な教育の柱になるものであると指摘するところから出発し、カリキュラム作成の原理や文型・文法事項などの言語事項の扱い方や、流用に基づく言語習得の素材としてのマスターテキストの作成の方法や学習指導の基本的な手順などを含めて、自己表現活動中心のカリキュラムと教材の開発について包括的に論じた。

第10章は、バフチン言語観の接触場面研究への応用で、検討課題は、接触場面言語活動にある母語話者はなぜ第二言語話者の語りを支援することができるかである。接触場面言語活動における第二言語話者の語りにおいてはテーマはしばしば完結した発話という形に具象化されず、話し方はしばしば断片的なものや不適正なものとなる。そのような事態において、第二言語話者と母語話者は発話を完結させなければ次の発話行為に移行することができないので、その事態を開閉しようとする。その結果として、第二言語話者自身の言い直し、母語話者による言い換え、母語話者による言い直しなどを含む現象がしばしば現れる。収集された会話データでもそうした現象が多数観察された。そのような現象は、当該の状況で言語活動を前進させようとして第二言語話者と母語話者が協働的に行う作業の産物である。本研究では、そのような作業を発話プロジェクトと呼んだ。発話プロジェクトが展開する様態を第二言語話者自身の貢献と話し相手である母語話者の貢献に注目してさらに分析し、分類を行った結果、第二言語話者と母語話者がまだ十全な象(かたち)を得ていない第二言語話者の発話について相互的にグラウンディング(Clark, 1996)しようとしている様態が浮き彫りになった。そして、そのような様態は、立ち現れるポリフォニックな対話的空間を基盤として両者は言語的相互作用に従事していると仮定することで最もよく説明できると論じた。

最後の第11章では、本研究で明らかになった諸点を簡潔にまとめた上で、今後の研究と実践に向けていくつかの論点について議論を行った。まず始めに、本研究で扱ったバフチンの言語論の根幹にあるのは観念論あるいは記号に媒介されない意味という見方の拒否であり、バフチンの言語論は全体としてモノロジズムへの全面的な反論となってい

ることを指摘した。次に、教育実践に関わる議論としては、第9章で問題提起した、第二言語学習において学習者が感じる「わからない」という現象を採り上げて論じた。そして、その現象とクラシェン (Krashen, 1981; 1982; 1985) の習得理論や第4章で論じたヴィゴツキーの第二言語習得観との関連についても議論した上で、フォーカス・オン・フォーム (focus on form, Long and Robinson, 1998) の見方を援用して、「わからない」問題に関して重要な点は、その課題解決がグラウンディングを達成して言語活動を前進させるような脈絡に「わからない」の発生場所が置かれていることであると指摘した。第10章での分析からも推察されるように、「わからない」の発生場所がそのような位置に置かれてこそ、「わからない」の解決が言語活動従事に関与する知識の補充と補強につながると考えられるのである。最後に、研究面では、第二言語教育の関心の下での研究として、ポドテキストや他者の言葉の引用や混成的構文 (hybrid construction, バフチン, 1934-35/1996) やプロレプシス (予弁法, Rommetveit, 1974) などに着目した、母語話者場面と接触場面を含むさまざまな言語活動についてのダイアロジズムの視点からの研究が今後行われるべきことを指摘した。

本研究で議論したバフチン言語観についての個々の論点は多かれ少なかれ先行研究で論じられていると言ってよい。しかしながら、それらの論点を独自の視点で統合してバフチンの言語哲学の全体像を描き出したことは本研究の成果である。また、そのような事情から、本研究は、第二言語教育者と第二言語教育研究者がバフチンの言語哲学を包括的に知るための初めての著作となっている。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (西口 光一)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	日野 信行
	副 査	教授	ディボフスキー・アレクサンドル
	副 査	准教授	大村 敬一

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、バフチンの思想の中で言語論の部分に焦点を当て、第二言語教育との関連において、バフチンの言語観を描き出すことを目的としている。第二言語教育の方法論が、ダイレクト・メソッドやオーディオリンガル・メソッドからコミュニカティブ・アプローチを経て、現在ではいわば理論も原理も定かでない混沌とした状況になっている現実に対する解決への示唆を探る意欲的な試みである。

まず第1章と第2章ではバフチンの言語論の基本的視座について論じ、バフチンにおいてはイデオロギー的交通の脈略にある発話こそが言語の真の姿であり、ソシユールに代表される抽象的客観主義としてのラング的な言語観に対する批判がバフチン言語論の重要な要素であることを論証している。

第3章と第4章は、バフチン言語論における主観的心理についての見解を明らかにし、バフチンの思想との親近性が指摘されるヴィゴツキーの発達論を概観した上で、両者の重なる中心点を指摘している。

上記の議論に基づいて第5章と第6章では、言語活動従事者に関する知識は何かという問いを立て、バフチンのことばのジャンルの概念を軸として回答を試み、ホールの議論も援用しながら、ことばのジャンルとその働きは言語活動従事者におけるヒューリスティックな社会歴史的諸力であると位置づけている。

第7章は、要約に続き、バフチン言語論に関連して、ホルランドの自己とアイデンティティに関する実践理論を検討している。

第8章では、社会歴史的諸力の概念を基盤として、バフチンにおける対話や対話原理について考察している。対話とは、変化し続ける一つのポリフォニックな対話的空間と、もう一つの同じく変化し続ける対話的空間との間で行われる相互作用であり、また対話原理とは、ことばのやり取りを伴う人と人との接触・交流を、そして人間の意識や心理の有り様を、対話的に見るという主義であることが示されている。

第9章は、自己表現活動中心の基礎日本語教育のカリキュラムと教材の開発を対象として、バフチン言語論の第二言語教育の実践への応用について論じている。本章での議論を通して、バフチンの言語観から、第二言語習得の経路は第二言語によって段階的に自己創作できるようになる経路としてデザインすることができること、またローカルな言語習得は言葉遣いの流用の心理過程としてデザインすることができること、という2つの重要な示唆が得られることが示されている。

第10章は、バフチン言語観を接触場面研究に応用するものである。第二言語話者と母語話者がまだ十全な象(かたち)を得ていない第二言語話者の発話について相互的にグラウンディングしようとしている様態を浮き彫りにし、そしてそのような様態については、両者が、立ち現われるポリフォニックな対話的空間を基盤として言語的相互作用に従事していると仮定することで最もよく説明できると論じている。

最後の第11章は、本論文で明らかになった諸点の総括とともに、今後の研究と実践における課題について論じている。まず、バフチンの言語論は全体としてモノロジズムへの全面的な反論となっていることを指摘する。次に、教育実践に関しては、第二言語学習において学習者が感じる「わからない」という現象について、「わからない」の発生場所が、課題解決を通してグラウンディングを達成し言語活動を前進させるような脈略に置かれていることが重要な点であると論じている。最後に、研究面では、母語話者場面と接触場面を含むさまざまな言語活動に関して、ダイアロジズムの視点からの研究を今後行っていくことの必要性について述べている。

以上のような議論を通して、本論文は、新たな第二言語教育を構築するための基盤として、またソシユール的な言

語観の代替案として、バフチンの言語論を提示することに成功している。また、接触場面相互行為の新たな研究方法を提示している点も高く評価できる。

なお、審査においては、本論文の内容に関して、バフチン言語論が生まれた旧ソ連の時代的・社会的背景の分析についてはさらに深く掘り下げる余地もあること、また、提示された教育実践の方法論において、バフチン言語論から導き出される部分と現実の教育現場の要請から生じる考慮との境界にやや曖昧な部分もあること、などの課題も指摘された。しかしながらこれらの点は、本論文の総体においては、その学術的価値を損なうものではない。

本論文は、従来のバフチン研究の多くとは異なる視点、すなわち第二言語教育への応用という観点からの先駆的な研究であり、統合的なアプローチによって新しい貴重な知見を導いている。第二言語教育の理論と実践の両面において顕著な貢献を成す論文である。

以上のように、本論文を、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。